

研 究

対児感情の低い母親の妊娠期から産褥期における傾向と特徴

武田 江里子

〔論文要旨〕

対児感情の低い母親の傾向と特徴を知ることが目的に、妊娠末期・入院中・産後1か月に対児感情・気分・影響要因・ストレスについて調査分析した。対児感情の低い母親は初産婦・仕事あり・混合栄養の人に多く、ストレス内容では平均的な母親と有意差はなかった。全時期とも肯定的な気分が低く、否定的な気分が高い傾向にあった。産後のうつ傾向、混乱等の否定的な傾向が平均的な母親より強く表れており、産後経過を気にしている人が多かった。対児感情が低い母親はいつも同じ母親ではなく、時期により異なっていることから、対児感情は変動するということであり、母子を取り巻く環境としてわれわれはそのことをわきまえてケアにあたる必要がある。

Key words: 対児感情の低い母親, 妊娠期～産褥期, 日本版 POMS, ストレス, 縦断的調査

I. はじめに

子どもにとっては母親との関係が胎生期も含めて最初の人間関係であることは否めない事実であり、子どもを取り巻く環境として母親は最も注目すべき存在である¹⁾。しかし、その母親が子どもを虐待するという事件を耳にすることが多くなり、東京都の実態報告によると、平成16年度の虐待相談件数は3,026件と過去最高を記録し、そのうち実母による虐待は63.3%、生命の危機を伴う虐待においては実母が72.4%を占めていた。虐待を受けた子どもの49.4%は特に問題のない子どもであった。子ども側に特に問題が見出せない状況においては、主たる虐待者である母親側の要因を探る必要があるのではないか。

その母親の子どもに対する感情は、母親だけの問題ではなく、虐待とまではいかなくても子どもの成長発達に大きく影響を及ぼすものである²⁾³⁾。親と子の関係性は肯定的な感情と否定

的な感情が無数に交絡しながら育っていく⁴⁾と指摘されるように、子どもを可愛いと思えない時があってもそれは誰にでもあることである。しかし、その無数の感情のなかでも、やはり子どもを「可愛い」という感情が他の感情に勝ることが必要なのではないだろうか⁵⁾。子どもに対する感情(対児感情)や母親の気分を経時的に調査している研究^{6)~8)}は多いが、その対児感情の低い母親の特徴を検証している研究は少ない。われわれがかかわることができる時期において、対児感情の低い母親の傾向・特徴を明らかにし、子どもへの感情を促す援助を考察することは意義があると考えた。

II. 研究目的

妊娠末期・産後入院中(以下、入院中と表示)・産後1か月の母親の子どもに対する感情、母親の気分および各々の時期に持つストレス内容や影響要因を探索し、子どもに対する感情の低い母親の傾向および特徴を検証し、子どもへ

The Characteristics and Tendencies of Mothers with Insufficient Feelings for their Child
During Pregnancy and the Puerperal Period

Eriko TAKEDA

国際医療福祉大学大学院医療福祉学専攻助産学分野(教育職/助産師)

別刷請求先: 武田江里子 国際医療福祉大学大学院 〒324-8501 栃木県大田原市北金丸2600-1

Tel: 0287-24-3000 Fax: 0287-24-3100

[1906]

受付 07. 1.15

採用 07. 7. 5

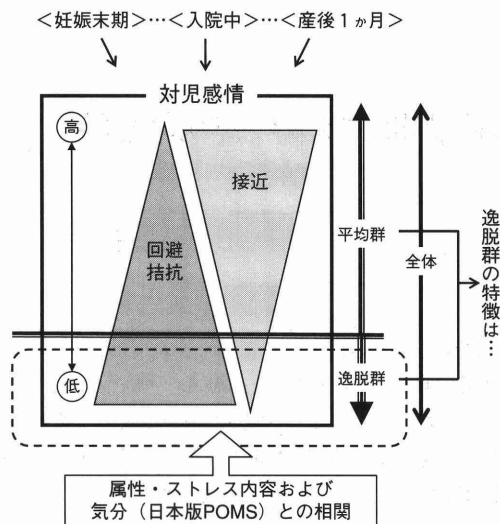


図1 研究の枠組み

の感情を促す援助を考察する基礎資料とする(図1)。

用語の操作的定義

子どもに対する感情

花沢⁹⁾の開発した「対児感情」尺度で表す。愛着的感情を示す「接近得点」、否定的感情を示す「回避得点」、愛着的感情と否定的感情の拮抗する感情を示す「拮抗指数」(回避得点/接近得点×100)で表す。本研究においては、接近得点の平均値より1標準偏差を引いた得点に属する人、または回避得点・拮抗指数の平均値に1標準偏差を足した得点に属する人を対児感情が低い人(以下、逸脱群と表示する)とした。

母親の気分

日本版 Profile of mood states (以下 POMS と表示)¹⁰⁾ により測定した気分を表す。これは「緊張不安」、「抑うつ一落込み」、「怒り一敵意」、「活気」、「疲労」、「混乱」の6つの領域からなり、この6つでストレス反応の結果生じうるすべての情動を網羅していると言われている。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

2つの産婦人科クリニックにおいて、妊娠末期の時点で正常に経過している妊婦(母親)70

名。有効回答数は、妊娠末期で69名、産褥入院中で67名、産後1か月で65名であった。

2. 調査期間

2005年6月から9月。

3. 調査方法

妊娠末期・入院中・産後1か月の3回の時期に同じ対象に自記式質問紙による縦断的調査を行った。

4. 調査内容

妊娠末期・入院中・産後1か月のいずれにおいても「対児感情」と「気分(POMSによる)」の測定を行った。そのほかの質問紙の内容は、各時期で異なり以下のとおりである。

1) 妊娠末期

年齢、仕事の有無、核家族か否か、妊娠歴、出産歴、流産経験の有無、ストレスの有無。ストレス内容としてあげた13項目(表1)をストレスと感じているか否か。

2) 入院中

出産満足度、児の出生時体重、児への栄養方法、母乳に対する考え、ストレスの有無、ストレス内容としてあげた14項目(表1)をストレスと感じているか否か。

3) 産後1か月

健診での注意の有無、里帰りの有無、児への栄養方法、母乳に対する考え、出産時のわだかまりの有無、出産体験の良し悪し、ストレスの

表1 各時期のストレス内容(調査項目)

妊娠末期 (13項目)	入院中 (14項目)	産後1か月 (17項目)
出産のこと なんとなく不安 思うように動けないこと お腹の赤ちゃんのこと 義理の親のこと 上の子のこと 自分の容姿 夫のこと 自分の親のこと 家事協力のないこと 相談相手のいないこと 病院の対応 その他	母乳のこと 産後経過 赤ちゃんの経過 なんとなく不安 出産時の疲労 育児すること 夜眠れないこと 自分の容姿 留守宅のこと 産後の手伝いのこと 病院の対応 赤ちゃんが泣くこと イメージと違うこと その他	なんとなく不安 自分の容姿 母乳のこと 夜眠れないこと 自由な時間がないこと 赤ちゃんの経過 赤ちゃんが泣くこと 義理の親との関係 産後の疲労 産後経過 夫との関係 自分の親との関係 育児の手伝いのないこと イメージと違うこと 相談相手のいないこと 病院の対応 その他

有無。ストレス内容としてあげた17項目(表1)をストレスと感じているか否か。

5. 倫理的配慮

対象者には、口頭と文書にて説明し同意書を得た。また依頼先のクリニックの管理者・責任者には目的・方法を説明し同意を得たうえで実施した。調査用紙の回収にあたっては、封筒および回収箱を準備し、他人に見えないよう配慮した。

6. 分析方法

逸脱群の傾向をみるのに、逸脱群以外の群(以下、平均群と表示する)と各変数において t 検定および χ^2 検定を行った(有意水準は5%とした)。逸脱群の特徴は各変数との相関分析からみていき、気分(POMS)との相関はピアソン相関係数を用い、その他の要因との相関は相関比イータを用いた。統計学的処理には統計ソフトSPSS(12.0J)を使用した。

IV. 結 果

1. 対象の属性

表2に示すように、年齢は30歳以上と未満がほぼ半々で、家族構成は核家族が75.4%、仕事は「あり、またはあった」が62.7%、妊娠歴は初妊婦と経妊婦が半数であったが流産経験のある人が14.5%おり、そのため出産歴では初産婦が60.9%と多くなっていた。

表2 対象の属性 (n=69名)

年齢	30歳未満	33(47.8)
	30歳以上	36(52.2)
家族構成	核家族	52(75.4)
	核家族以外	17(24.6)
仕事	仕事なし	26(37.3)
	仕事あり・またはあった	43(62.7)
妊娠歴	初妊婦	35(50.7)
	経妊婦	34(49.3)
流産経験	経験あり	10(14.5)
	経験なし	59(85.5)
出産歴	初産婦	42(60.9)
	経産婦	27(39.1)

単位: 名 (%)

2. 全体の対児感情と属性・ストレス内容・気分(POMS)との相関

対児感情と属性(2区分にした)ならびにストレス内容(有無)等の相関は相関比を用い、POMSとの相関はピアソン相関係数を用いた。

どの時期においても対児感情と属性およびストレス内容とは有意な相関はみられなかった。気分においては、妊娠末期は有意な相関はみられず、入院中の接近感情と「活気」で0.559、産後1か月の回避得点・拮抗指数と「緊張—不安」、「抑うつ—落込み」、「怒り—敵意」、「疲労」、「混乱」という「活気」以外の否定的感情と0.40~0.53の相関がみられた。

3. 対児感情の低い人(逸脱群)

1) 対児感情の経時的変化(図2-①, ②, ③)

各時期で逸脱する人は同じではないため、ここでは全体の傾向を示す。対児感情の全体の傾向は図2のように、3つの時期のなかでは、入院中が接近得点が最も高く、回避得点・拮抗指数が最も低くなっていた。また、いずれの時期においても接近得点が回避得点より高くなっていた。

2) 対児感情の低い人(逸脱群)の割合

表3のように、各時期いずれの対児感情においても逸脱群は10名前後(11~17%)であったが、入院中の拮抗指数逸脱群のみ5名(7.5%)と少なかった。

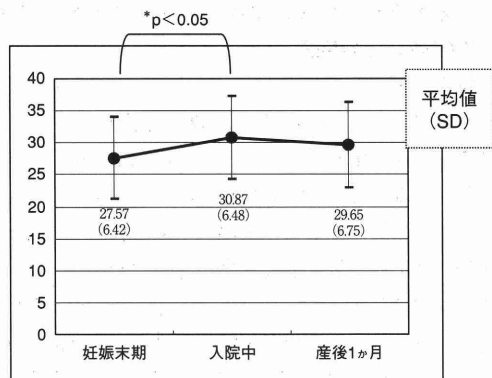
3) 各時期の対児感情逸脱群の分布(図3)

3つの時期を通して逸脱群に属する人もいれば、妊娠末期のみの人、妊娠末期に属して入院中は属さず、産後1か月で再び属する人、または全く属さない人など、さまざまであった。

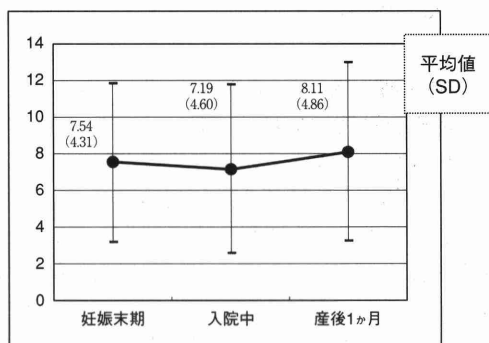
4. 対児感情逸脱群と平均群との比較(表4)

1) 各時期における逸脱群と平均群の比較

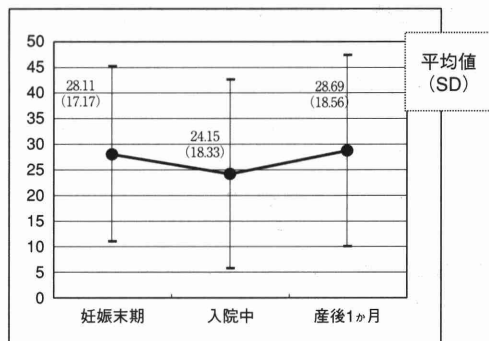
POMSおよび対児感情は得点化されている量的データであるため平均値の差の検定として t 検定を用い、他の項目はカテゴリーデータであるため χ^2 検定を用いて有意差をみた。なお、すべての時期において、対児感情は逸脱群が他の群より接近得点は低く($p < 0.05$)、回避得点・拮抗指数は高く($p < 0.05$)になっていた。以下、有意差がみられたものについて述べていく。



① 接近得点の経時的変化 (平均値 ± 1SD)



② 回避得点の経時的変化 (平均値 ± 1SD)



③ 拮抗指数の経時的変化 (平均値 ± 1SD)

図2-①②③ 対児感情の経時的変化

表3 対児感情の低い人(逸脱群)の人数と割合

	接近得点 逸脱群	回避得点 逸脱群	拮抗指数 逸脱群
妊娠末期 (n=69)	12名 (17.4%)	9名 (13.0%)	8名 (11.6%)
入院中 (n=67)	12名 (17.9%)	10名 (14.9%)	5名 (7.5%)
産後1か月 (n=65)	11名 (16.9%)	10名 (15.4%)	10名 (15.4%)

(1) 妊娠末期

回避得点では初産の割合が逸脱群で多く、また仕事を持っている(持っていた)人が多かった。気分においては逸脱群の方が「活気」が低くなっていた。

(2) 入院中

いずれの逸脱群においても、母乳のみの人はいなかった。気分においては「活気」は逸脱群が低く、「抑うつ—落込み」、「怒り—敵意」、「混乱」は逸脱群が高かった。

(3) 産後1か月

気分においては「活気」は逸脱群が低く、「緊張—不安」、「抑うつ—落込み」、「怒り—敵意」、「疲労」、「混乱」は逸脱群が高かった。

いずれの時期においてもストレス内容については、逸脱群・平均群での有意差はみられなかった。

2) 逸脱群で相関の高かった項目、およびその項目における平均群での相関(表5)

決定係数 R^2 値0.5以上を目安として相関比および相関係数0.7以上の項目を抜粋。

(1) 妊娠末期

拮抗指数逸脱群において、負の相関が幾つかみられた。その中で回避得点と「緊張—不安」は、逸脱群では負の相関であったが平均群では正の相関がみられた。

(2) 入院中

回避得点逸脱群と拮抗指数逸脱群において、「産後経過」にストレスを感じていたことと高い相関がみられた。「活気」において、拮抗指数逸脱群の接近得点と高い相関がみられたが、該当者が少ないため有意差はみられなかった。その項目での平均群では0.55以上の正の相関がみられた。

(3) 産後1か月

逸脱群の回避得点および拮抗指数と「抑うつ—落込み」で高い相関がみられ、この項目における平均群でも0.35~0.47の相関がみられた。逸脱群の回避得点と「健診時の注意」、および拮抗指数と「義理の親との関係」、「夜眠れない」というストレスにおいて高い相関がみられた。これらの項目の平均群での相関はみられなかった。

対象者 番号	妊娠末期			入院中			産後1か月		
	接近得点	回避得点	拮抗指数	接近得点	回避得点	拮抗指数	接近得点	回避得点	拮抗指数
1★	○	○	●	○		○	●		○
5	○								
11		○	○						
12					●	○			
13					○			○	○
14					○				
15		○							
16★	○		○		○		○		
17		○						○	●
19					○			○	
20				○			○		
24					○	○		○	○
25★	●			●			○		
27		○	○					○	○
28								●	○
31★	○			○			○		
36				○	●	●		●	●
38				○			○	●	●
39	○			○					
40				○					
41				○			○		
42				○			○		
44		○	○		○				
48					○	○		○	
61	○			○					
62	○		○		○				
63	○								
66★		○	●	○			●		
67	●							○	○
70		●	●						
71							○		○
72							○		
75		○	○						
77	○								
79	○								

無印：逸脱なし
○印：接近得点（平均－1SD），回避得点・拮抗指数（平均＋1SD）に属する人
●印：接近得点（平均－2SD），回避得点・拮抗指数（平均＋2SD）に属する人

図3 各期の対児感情逸脱群の分布（対象者番号についている★は3つの時期ともに逸脱ありの人）

表 4 逸脱群と平均群で有意差 (p<0.05) のみられた項目 ※m=平均値

(全体 n=69)		項目	逸脱群 (nは各逸脱群ごと)	平均群 (n=全体群-逸脱群)
妊娠末期	接近得点逸脱群 (n=12)	接近得点	m=17.33	m=29.72
	回避得点逸脱群 (n=9)	出産歴 仕事の有無 P「活気」 回避得点 拮抗指数	初産=8 (89%) 経産=1 (11%) なし=1 (11%) あり=8 (89%) m=44.22 m=15.0 m=55.867	初産=34 (57%) 経産=26 (43%) なし=25 (42%) あり=35 (58%) m=50.57 m=6.42 m=23.950
	拮抗指数逸脱群 (n=9)	回避得点 拮抗指数	m=14.22 m=58.356	m=6.53 m=23.577
(全体 n=67)		項目	逸脱群 (nは各逸脱群ごと)	平均群 (n=全体群-逸脱群)
入院中	接近得点逸脱群 (n=12)	母乳か混合か P「活気」 接近得点	母乳=0 (0%) 混合=12 (100%) m=45.75 m=19.83	母乳=10 (18%) 混合=45 (82%) m=54.82 m=33.27
	回避得点逸脱群 (n=10)	母乳か混合か P「抑うつ-落込み」 P「怒り-敵意」 P「混乱」 回避得点 拮抗指数	母乳=0 (0%) 混合=10 (100%) m=51.40 m=48.70 m=53.30 m=15.40 m=50.855	母乳=10 (18%) 混合=47 (82%) m=45.48 m=42.59 m=47.16 m=5.75 m=19.468
	拮抗指数逸脱群 (n=5)	母乳か混合か P「抑うつ-落込み」 P「怒り-敵意」 P「混乱」 回避得点	母乳=0 (0%) 混合=5 (100%) m=54.00 m=51.40 m=57.40 m=16.00	母乳=10 (16%) 混合=52 (84%) m=45.75 m=42.86 m=47.32 m=6.48
(全体 n=65)		項目	逸脱群 (nは各逸脱群ごと)	平均群 (n=全体群-逸脱群)
産後1か月	接近得点逸脱群 (n=11)	P「活気」 接近得点	m=41.82 m=18.64	m=50.48 m=31.89
	回避得点逸脱群 (n=10)	P「緊張-不安」 P「抑うつ-落込み」 P「怒り-敵意」 P「疲労」 P「混乱」 回避得点 拮抗指数	m=58.10 m=55.30 m=57.20 m=58.60 m=59.70 m=16.60 m=59.175	m=48.75 m=46.05 m=46.04 m=48.84 m=50.11 m=6.56 m=23.156
	拮抗指数逸脱群 (n=10)	P「緊張-不安」 P「怒り-敵意」 P「疲労」 P「混乱」 回避得点 拮抗指数	m=55.60 m=54.80 m=56.50 m=57.30 m=15.80 m=61.322	m=49.20 m=46.47 m=49.22 m=50.55 m=6.71 m=22.766

※ P「」は POMS の各気分を表す。
※ POMS および対児感情については t 検定、その他の項目は χ² 検定を行った結果。

V. 考 察

1. 各時期における対児感情逸脱群の傾向と特徴

1) 妊娠末期

回避得点逸脱群に、初産婦が多く、また仕事

あり(あった)の人が多かったことから、出産経験や仕事の有無は子どもへの感情を予測し、その感情を促すうえでの大切な情報のひとつになりえるということが確認できた。また子どもを回避する気持ちが強い人は気分において「活

表5 対児感情逸脱群の中で0.7以上の相関が見られた項目および平均群での相関

妊娠末期	逸脱群の相関係数および相関比	平均群での相関
接近得点逸脱群	(0.7以上の相関なし)	
回避得点逸脱群	(0.7以上の相関なし)	
拮抗指数逸脱群	接近得点と POMS「緊張-不安」→-0.725*	0.197
	回避得点と POMS「緊張-不安」→-0.762*	0.306*
	回避得点と POMS「怒り-敵意」→-0.703*	0.102
入院中	逸脱群の相関係数および相関比	平均群での相関
接近得点逸脱群	(0.7以上の相関なし)	
回避得点逸脱群	接近得点と「産後経過」にストレス→0.899**	0.109
	回避得点と「産後経過」にストレス→0.887**	0.034
	拮抗指数と「産後経過」にストレス→0.978**	0.154
拮抗指数逸脱群	接近得点と POMS「活気」→0.867	0.555**
	接近得点と「産後経過」にストレス→0.995**	0.092
産後1か月	逸脱群の相関係数および相関比	平均群での相関
接近得点逸脱群	回避得点と POMS「抑うつ-落込み」→0.877**	0.363**
	拮抗指数と POMS「抑うつ-落込み」→0.831**	0.352**
回避得点逸脱群	拮抗指数と「義理の親との関係」にストレス→0.787**	0.093
拮抗指数逸脱群	回避得点と「健診時の注意」→0.821**	0.038
	拮抗指数と POMS「抑うつ-落込み」→0.779**	0.419**
	拮抗指数と「夜眠れない」にストレス→0.861**	0.217
	拮抗指数と「義理の親との関係」にストレス→0.861**	0.109

備考) POMS との相関はピアソン相関係数, その他は相関比イータを用いている。 * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

気」が少なかった。妊娠期から産褥期は多くの妊産褥婦は肯定的な感情を有している¹¹⁾と言われているが、逸脱群は否定的な気分においては平均群との差はみられなかったものの肯定的な気分である「活気」は低かった。妊娠末期の妊婦は積極性がやや低下する傾向にあるという研究結果¹²⁾もあるが、その気分が子どもへの感情に影響することから、否定的気分への対処とともに、妊娠も含めた日常生活全体が活気づけられるような援助・関わりも意識して行っていくことが必要と言える。

逸脱群の特徴を相関分析にて探索した結果、この時期では拮抗指数逸脱群において「緊張—不安」と接近得点・回避得点がともに負の相関がみられた。これは接近得点が高くなると「緊張—不安」が低くなり、また回避得点が高くなっても「緊張—不安」が低くなっているということである。さらに、回避得点が高くなると「怒り—敵意」が低くなる傾向がみられた。平均群では回避得点が高くなると「緊張—不安」が高くなるという正の相関がみられた。子どもに対する肯定的な感情と母親の肯定的な気分は関連

し、子どもへの否定的な感情と母親の否定的な気分は関連があることから考えると、逸脱群の回避得点と「緊張—不安」、「怒り—敵意」は逆説的な結果になっている。これは、緊張や不安というのは必ずしも否定的な気分とは捉えられず、ある程度の緊張や不安は状況に適応し順応するためには必要である⁵⁾¹³⁾ということに関係していると考えられる。逸脱群の妊娠から出産に向けてのこの時期の緊張や不安が低いことと回避得点が高いという相関は、その状況に対する適応への不足、つまり受容し切れていないために児への回避的感情が高くなるのではないかと考えられる。怒りや敵意については、子どもへの回避的な感情がその他に対する怒りや敵意の代替になっているのではないかと考える。

2) 入院中

母乳だけで十分な褥婦の方が回避得点が低かったという伊東ら⁶⁾の研究結果と同様に、いずれの逸脱群においても母乳のみの人はおらず、母乳が子どもへの感情を良い方向に促す可能性を持っていることが示唆された。ただし、全体の中では母乳は対児感情と相関はないこと

から、より対児感情を高める役割までは果たさないと考えられる。

気分においては、逸脱群の「活気」が低く、「抑うつ—落込み」、「怒り—敵意」、「混乱」が高いというのは、子どもへの感情が母親の気分と関連があることを示している。しかし、「緊張—不安」や「疲労」については逸脱群と平均群での差はみられなかった。入院という状況が「疲労」を少なくさせ、常に専門家の助けが得られる状況が「緊張—不安」を少なくしていると考えられる⁸⁾。このことから、母親の「緊張—不安」、「疲労」については、われわれのルチー的な働きかけだけでも十分に良い方向へ向けることができる可能性が示唆された。この母子の最初の出会いの時期に、不慣れな母親にとって入院というのは、子どもへの感情にも影響する状況をもたらすと言える。産後3日～1週間は一般的にもマタニティブルーで気分は落込みやすい時期であり²⁾、その傾向が逸脱群においては顕著に表れた結果と言える。また一般的に産後母親は、自分や子どもが思うようにいかないことに怒りを感じたり、時として子どもに敵意を持ったりすることがあり¹⁴⁾、いろいろな気分が混在し混乱することがある。その傾向が逸脱群にはより強く表れていると考えられる。

入院中の逸脱群で相関がみられたのは、「産後経過」にストレスを感じていることであり、これは「疲労」とは相関がみられなかったことから、疲れというよりは大きく変化した自分自身の身体に対する戸惑いと、経過が思わしくないと子どもに対しても愛着を持ちにくいことを表していると考えられる。産後経過に対する身体面のみでなく心理面への援助が入院中の母親には必要であることが確認できた。

3) 産後1か月

逸脱群の方が、より子どもへの肯定的感情と母親の肯定的気分、否定的感情と否定的気分との関係の傾向が有意に強く表れていた。この時期においても母親の気分への働きかけの重要性が確認できた。逸脱群の中での相関をみると、否定的な気分の中でも「抑うつ—落込み」と高い相関がみられており、この気分においては平均群でも相関はみられたが、相関係数の大きさは逸脱群の方が高く、前述したように

平均値のt検定においても有意差がみられていた項目のひとつであった。長谷川ら⁸⁾の研究でも産後1か月に「抑うつ—落込み」が上昇するという結果になったが、逸脱群においてはその傾向がより強く表れていた。産後1か月でマタニティブルーである人は産後うつ病へ移行する率が高くなると言われているが、それに伴い子どもへの感情が低下することから、退院し産後1か月までのフォローの必要性を再認識し、その方法についても検討していくことが必要である。「健診時の注意」を受けたか、「義理の親との関係」、「夜眠れない」ことにストレスを感じているかで逸脱群の中では高い相関がみられたが、該当者はそれぞれ1～2人であり、一般的傾向として述べることはできない。しかし、高い相関があることから決して無視することはできず、人数やストレス内容にこだわらずフォローしていくことが必要である。

いずれの時期においてもストレス内容については、逸脱群・平均群での有意差はみられなかったことから、ストレス内容に注目することも必要だが、同じストレスでも人によって捉え方は異なり、また対処方法も異なることをわきまえ、一人ひとりに注目しケアにあたることが必要である。

2. 各時期における対児感情逸脱群の推移(図3)

逸脱群の分布は各時期さまざまで、ひとつの時期で対児感情が低いからといって、ずっと低く経過するというのではないこと、後々対児感情が低くも高くも変動する可能性が高いということである。母子の環境の一部としてこの時期にかかわるわれわれには、自らのかかわりが対児感情に影響することを認識し、高めるための役割を担うことが求められる¹⁵⁾。

VI. 結 論

対児感情の低い人の傾向および特徴は表6の通りであった。ケアについて以下にあげる。

1. 表6の1, 2については、個々との対話の中からより個別的な情報を得て具体的なケアにつとめる。
2. 複雑な心理状態であることを踏まえ、状況への適応を促すようなケアにつとめる。

表6 対児感情の低い人(逸脱群)の特徴と傾向

1. 逸脱群と平均群で有意差がみられたストレス内容はなかった。
 2. 初産婦・仕事を持っている(持っていた)人・母乳のみではない人に多かった。
 3. 妊娠末期の状況に対する適応の不足が考えられた。
 4. 全時期を通して肯定的な気分が低く、否定的な気分が高い傾向にあった。
 5. 産後の一般的なうつ傾向、混乱等の否定的な傾向がより強く表れていた。
 6. 産後経過を気にしている人に多かった。
 7. 対児感情は常に一定しているわけではなく、時期や状況で変化し多様化していた。
3. 母親の気分への働きかけを大切にし、否定的な気分への対処とともに生活全体が活気づけられるようにケアしていく。
 4. 退院後から産後1か月健診までのフォローの方法を検討していく。
 5. 産後経過については身体面のみでなく心理面へのケアも重視する。
 6. 対児感情はさまざまな状況で良くも悪くも変化することをわきまえて、ケアすることが必要といえる。
- 妊娠末期から産後1か月という医療従事者がかかわりやすいこの時期に、母子の環境の一部としてのわれわれの役割は大きいと言える。

VII. 研究の限界と今後の課題

今回はストレス内容を項目での有無で問う形の調査であったため、具体的なケアを考察するまでには至らなかった。ストレス内容とともに、そのストレスをどのように捉え、また対処法を知っているかが重要である。今後は、ストレス対処に関する調査内容を加えた面接法による調査にて、対児感情の低い人たちの傾向や特徴をより明確にし、具体的なケアが抽出できるようにしたい。

付 記

本研究の一部は、第53回日本小児保健学会において発表した。

文 献

- 1) 加藤和生. 愛着と児童虐待—愛着の病理. 教育と医学 2004; 52 (5): 442-451.

- 2) 和田サヨ子, 新道幸恵. 母性の心理社会的側面と看護ケア. 第1版. 東京: 医学書院, 1997: 99-108, 117-122.
- 3) I.F. ブロッキントン. 母性とメンタルヘルス. 第1版. 東京: 日本評論社, 1999: 359-390.
- 4) 田中千穂子. 「世代間伝達」の功罪. 教育と医学 2004; 52 (5): 401-410.
- 5) M.H. クラウス, J.H. ケネル, P.H. クラウス, (竹内 徹訳). 親と子のきずなはどうつくられるか. 第1版. 東京: 医学書院, 2003: 1-51.
- 6) 伊東和子, 清野喜久美, 関島英子他. 産褥時の対児感情を左右する影響要因. 母性衛生 1996; 37 (4): 455-463.
- 7) 阿南あゆみ, 竹山ゆみ子, 永松有紀, 他. 対児感情に影響をおよぼす要因の検討. 産業医科大学雑誌 2005; 27 (4): 385-393.
- 8) 長谷川トミエ. 妊婦・褥婦の気分・感情の状態の変化とその関連性. 山口県立大学看護学部紀要 2001; 5: 11-17.
- 9) 花沢成一. 母性心理学. 第1版. 東京: 医学書院, 1992: 61-91.
- 10) 横山和仁, 下光輝一, 野村 忍. POMS 事例集. 初版. 東京: 金子書房, 2003: 8-55.
- 11) 村井則子. 母親の心理学. 初版. 仙台: 東北大学出版会, 2002: 193-210.
- 12) 大村いづみ. 妊娠・産褥期における母親意識と抑うつ状態について. 名古屋市立大学看護学部紀要 2003; 3: 23-27.
- 13) 蛭田由美, 亀井睦子, 西脇美春. 褥婦の出産体験の受け止め方と不安の変化. 母性衛生 1997; 38 (2): 303-311.
- 14) Deutch.H. 母親の心理1. 初版. 東京: 日本教文社, 1964: 31-92.
- 15) Vivette Glover, Thomas G O'Connor (吉田敦子訳). 出産前の母親のストレスや不安が子どもへ与える長期的影響. 臨床精神医学 2004; 33 (8): 983-994.

[Summary]

To determine the characteristics and tendencies of mothers with insufficient feelings for their child, this study investigated maternal feelings for the child, maternal mood, influencing factors, and stress in 69 mothers at the end of the third trimester.

ter, during the puerperal period in hospital and at one month postpartum. Many of the mothers with insufficient feelings for their child were primiparas, were employed, and were not able to breastfeed solely. There was no significant difference in stress between these mothers and mothers with usual maternal feelings. Mothers with insufficient feelings tended to have few positive moods and many negative moods throughout the study period. After giving birth, these mothers also tended to show more negative moods, such as depression and confusion, as well as concern about their return to pre-

pregnancy state than mothers with usual maternal moods. Mothers with insufficient feelings for their child showed varying feelings for their child at the different study periods. Healthcare professionals caring with these mothers and their children should be cognizant of these characteristics and tendencies.

[Key words]

Mother with insufficient feelings for the child,
pregnancy to puerpera, Profile of Mood States,
Stress, Longitudinal study